

創造としての補修

2017～2019年度

つちのいえの根本的な考え方の一つに、創作だけを特権化することなく、創作と同等に、土地開拓や材料収集などの準備、環境や制作物の手入れや修復を重視することがある。技術や素材の共有と循環を根本に据えれば、創作が一方通行ではなく、つくることと壊れることが、対立することなく支え合い、循環することに気付く。

10年目になると、屋外に自然素材でつくられたつちのいえは傷みが出てきて、修理作業が増えてくる。修理・修復は、材料を刷新し、技術や仕組みを学び直し、さらに新しい工夫や意匠を加えるチャンスである。

すべてが「手入れ」ではないかとさえ思う。



茅葺き職人となったOBの木下愛理 (p.127) が来訪したのを機に、稲藁で葺いた屋根の部分の傷みを診察した。

表面下5cmくらいまで藁がぐたぐたになり、藁をとめている割竹が露出している。割竹は水の伝い道になって屋根の傷みを早める。

屋根の葺き替え

2017年9月25-27日

かつて故・齋藤親方と共に茅葺きを指導いただいた畑中屋根工事の吉田顕さんに再度来ていただき、傷んだ藁葺きの部分ほかの葺き替えを行った。過去の茅葺きは未体験の学生が参加し、得難い実習の時間になる。

茅は、この年の連休に、丹波の秋山陽先生の工房の前庭で集めたシノガヤを使った。

カンヴァス屋根に接する部分のケラバ(茅束の断面)の見せ方など、職人技はマネできない。



足場を建てて、古いワラをめくる



めくって現われた竹屋根の骨組み



編み込みの作業。針状に穴を空けた細竹に縄を通し、屋根に突き刺して、押え竹に縛りつけていく。(※p.74)



縄を3回まわして、足をつかって締めつける。



茅束は端では斜めにしてケラバ(断面)を見せる。



挿シ茅で傷んだ部分を補修して下さる吉田親方。



足場を吊って作業する。



高く尖らせていた茅屋根の折れた天辺を直す



大黒柱が見えていて、雨が伝うので針金で巻き縛る。



刈り込んだ天辺に陶器のサヤをかぶせて応急処置。



斜面を刈り込んで仕上げる有田加鈴（日本画4回生）。

藁葺きの部分だけでなく、周りの屋根も凹みが出てきていて、挿シ茅で補修いただく。われわれにできるのは足場を吊ったり、ガンギで表面を整えたり、刈り込んだりするくらい。

度重なる嵐で、高く尖らせていた茅屋根の天辺が折れ、大黒柱が見えていた。水が伝うので、刈り込んで巻き縛り、陶器のサヤをかぶせた。この部分にはすり鉢をかぶせる例もある。

天辺付近は押え竹がないので、編み込みができず、茅が抜けていく心配がある。それで、後日、銅板を巻くことにした。

へたれた稲藁の部分がふっくらと膨らみ、屋根面の凹凸もなめらかになった。屋根に精気がよみがえった。

吉田親方が天辺の処理のために足場を残して下さっている。



屋根の銅版帽子

2017年11月2日

芸祭で学生が来ないなか、長谷川直人先生と井上で屋根の天辺に銅版をかぶせる作業を行う。模範はないので、独自に工夫せねばならない。

銅板は0.2mm。36x120cmの定尺もの数枚しか入手できなかった。そのため、ほぼ対角線状に切って、各部分の端を折り合わせ、ハンダ付けしながらつないでいくやり方を創案する。

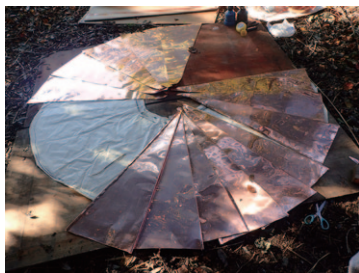


2017/10/5

紙を巻いて当たりをとり、型紙をつくる。



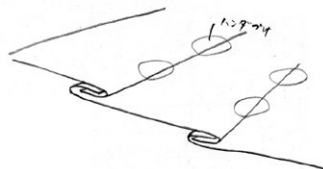
型紙。



銅板は0.2mm。雨樋など水周りの建材用のもの。



つなぎ合わせた銅板を持つ長谷川先生。



銅板の端を折り合わせ、ハンダづける。



屋根の天辺に巻く。



サヤをかぶせる。翌週には銅板に緑青が出た。



小さな帽子だが、茅の抑えと雨対策になる。

折れた竹の梁を直す

2017～2018年

2017年9月27日、屋根の葺き替えの際、竹の梁が3本も折れていることに気がついた。

屋根は分厚く、台風や大雨のときに過重になることが度重なったと思われる。

しかし今さら梁を付け替えるのは、屋根全体を作り直すことになるので、不可能だった。それで、竹の梁に足場丸太を突っ込んで補強することを思いついた。畑中屋根工事の吉田顕さんがたくさん残していったくれたのだ。

梁の支えにした柱も、丘の上の白樫の木を切り出して使った。

前例のない補修方法だが、つちのいえにはお似合いだった。



2017/9/27

竹の梁が柱が当たるところで折れていた。



丸太が竹に入るように、少し細くする。



2018/7/12

丸太を竹の梁に打ち込む。



2017/12/7

丸太をジャッキアップして梁を支え、まっすぐに直す。



丸太を突っ込んだ竹の梁を、丘の生木の柱で支える。



木の柱は、先の枝が二つに分かれているものを使った。アフリカ風である。

地面に埋め込んでいないが、屋根の荷重でしっかり立ち、まったく揺らがない。

気候変動とつちのいえ

2018年～

2010年代後半、しだいに加速する気候変動により、つちのいえや丘の環境に被害が出るが増えてきた。

平成30年7月の西日本豪雨で、東側出口の柱がずれ、壁が壊れた。



柱が束石からずれ、壁から半分遊離した。



2018年後期～2019年前期は、諸事情で授業がなく、修復は2019年後期に行った。

同年9月の超大型台風21号は、つちのいえの丘のカシノキの巨木を根こそぎに倒した。

幸い、つちのいえ母屋も土浮庵も無事だった。



土塗りの前に柱にシュロ縄を巻き、隙間に石をつめる。



土をしっかりと塗りこめ、柱と壁の修復を行う。

巨木、根こそぎ倒れる 2018年9月4日



葛に埋もれる丘

管理から外れたつちのいえの丘は、自然の生命力がみなぎっている。毎年、夏になれば、切り開いた道はすぐに葛の葉で埋まり、放っておけば、土浮庵もツタで覆われる。

秋の七草でもある葛は、繁殖力が強く、古くから食用や薬用に用いられ、取りだした繊維で葛布を織ったり、ツルでカゴを編むこともできる「芸術資源」だ。つちのいえでの葛の利用は、葛粉をつくる試み以外、まだ本格的になされていない。

(cf. p.130-131, p.166, 169)



葛に覆われつつある土浮庵 (2019年9月24日)。



人手がないので、草刈り機を使う (2019年8月2日)。



葛のツタが土浮庵に侵入している。



土浮庵の床の入口が草で埋まっているので草刈り。



2018年9月4日、四国から神戸に上陸した台風21号は、関西各地に大きな爪痕を残した。つちのいえの丘に生えている白樫の巨木も、根こそぎに倒れ、もう一本の巨木もへし折れた。

こうした「生態学的攪乱」は、丘の地面や植物に光をもたらし、人間には多くの材木を提供してくれる。

巨木はその後倒れたまま放置されている。京都芸大が沓掛から移転しても、しばらくこのままだろう。